

むかしむかしの紙芝居！

谷崎直子さんから、かつて昭和小学校の教員として勤めていた頃の教え子さんが、夏休みの宿題で作った紙芝居がご自宅から出てきたとの連絡をいただきました。『土地の言い伝えを紙芝居にしよう』をテーマとして、当時の受け持ちの2年生の子どもたちが取り組んだ作品だそうです。

そこで、10月18日（火）、朝の活動の時間に、谷崎直子さんに読み聞かせをしていただきました。

地域の伝承を素材とした大変貴重なお話を紙芝居にしたものです。遠い昔に思をはせながら全校で聞かせていただきました。

☆☆落田の話☆☆ 昭和小二年(作成当時) 伊藤元一《掲載了承済みです》

当時の 大井川 落田 伊東 神主さんに聞いた話です。

(※の注釈は、谷崎直子さんのものです。)



せんごくじだいのことでした。

大井川の中ごし山に小さなおしろがありました。(※1)

そのおしろを大井川じょうといいました。
そのころ今の昭和のことを、四手といっておりました。

四手には、今の八十八ヶ所に四手じょうがありました。

(※1)：隣保館の近くの山



ある時、大井川じょうと四手じょうのぶしたちの間に、せんそうがおこりました。

大井川のぶしたちが、白なめらの上までせめて来た時のことです。

四手じょうの方から雨のようにやがとんできました。これはあぶないと思った大井川のぶしたちは、せめていくのをやめて、じっと見ていました。



とんで来た、やは、全ぶとちゅうでおちてしまいました。何百本も何千本もおちて、やの山ができました。

それから、だれいとはなしに、そのやのおちたところを、「おちや」と言いました。

そののち、そこに、田んぼができ、人がすむようになってから、今の、「おちだ」と言う、地名にかわったと、言われます。



むかしむかしのこと、落田の人は、四手に行く時、わたしぶねで、四万十川をわたっていました。そこを、「ドウショオカ」と言いました。(※2)

そこは、そのむかし、四手の、ぶしたちが、大井川へせめて来る、けはいがしてきたので、大井川のぶしも、「せめていこうか、どうしょうか。」と、しあんしたところだそういです。

そこで、そのばしょを、「ドウショオカ」と、名付けたと、言われています。

(※2)：現在伊藤製材所の下の四万十川



それから、この土地にすむ人には、生まれてくる子どもがすぐにしんでしまったそうです。それは、せんごくじだいにたたかいにまけてしんだ人のたましいが、たくさんうもれているので、その人たちのすくいをしらせだとわかり、そののち、じぞうさんを作りおいのりをするようにしました。それから、子どもは、元気にそだつようになったと言われます。

今でもまい年十月には、くようのおまつりをしています。(※3)

(※3)：現在もある



★☆☆りゅうの池★☆☆

※作者の方と連絡が取れませんので、作品の掲載は控えさせていただきました。

二作目は、『りゅうの池』というお話でした。むかしむかし、現在のふるさと交流センターに大きな池があり、そこには、「りゅう」がすんでいたそうです。でも、水が汚れてすめなくなり、すむところを移しながら四万十川を下り、最後は愛媛県の深田というところまで行って命が尽きてしまったというお話でした。

谷崎直子さんが、「川の水を汚してはいけないことを昔から言っていたのですね。四万十川の水をいつまでもきれいに守ることが大事ですね。」と話されていました。

昭和には、この他にも、昔から語り継がれたたくさんの地域の伝承のお話があるのでしょうか。ふるさとを深く知る手がかりになりそうですね。